

伝説の分類

—日本とフィンランド—

高橋 静男

ハイナラハニ「拝み石」(トイン語名 Kumarruskivi 英名 Homage stone) という名の伝説がある。その石の前を通過する者は、黙礼して供物(石、小枝、松かさ、お金など)を供えなければならぬといふ。もし、それを怠れば、病氣や怪我をしたり、帰路に死ぬとか、石より先へ一步も進めなくなったり、道に迷うといわれている。日本にもまた拝み石という伝説がある。貴人が聖地に向かって遙拝した所の石と説く遙拝型と、貴人が出現した石と説く影向型の二種である。

この日芬両伝説には、名称と石に対する神聖觀に共通がある。しかし、その内容の違ひから、これらを同一の伝説とみなすことはできない。しかしながらまた、フィンランドの拝み石は、道の脇に位置し、道中の安全を祈願する対象となっており、その機能するところは、日本の道の神、道祖神と近似している。あるいはまた、日本の拝み石伝説は石の神聖性を説くことに主眼があつて、フィンランドの拝み石伝説よりも相対的な古さをとどめているとも思われる。

つまり、両伝説は同タイプの伝説でないとしても、石に対する宗教的意識をめぐらして、根源的なつながりを感じる。この場合、よくに「石」と「宗教性」の二点は、国内的研究と同様に、伝説の比較研究に際しても看過できない重要な要素である。

ハイナラハニの伝説カタログ ("A catalogue of historical and legends" Pirkko-Liisa Rausmaa 訳) の115の断片が今お伝説の検索は容易である。大項目として分類された「Religion」(信仰) の項をみると、そこに小項目として「Homage stones」(拝み石) となっている。一方、日本のカタログ (柳田國男編『日本伝説名鑑』) および多くの伝説集では、分類項目「石・岩の部」に、石・岩に関するすべての伝説が無秩序に羅列されており、冒頭から順次読み進むほかに資料検索の手ではない。もし、各民族の伝説集がこのよろな分類に基づいて記載されているとしたら、数十民族の比較の資料を入手する場合を想定すると、気が遠くなるようないがする。

日芬のこの二つの伝説カタログの相違は、分類する目的の違いからきていると思われる。Rausmaa 女史編のカタログでは、「大項目」は、定住、自然、信仰、罪と罰、不思議な人物、社会、迫害と戦争との関連を明らかにしようという意図がみえる。「小項目」は、例えば大項目の「信仰」をみると、石、木、泉、土地、教会といふように、特定の場所について語られるという伝説の特性を明らかにしている。これに対して「名鑑」および多くの伝説集にみられる分類は、木、石・岩、水、塚、坂・峠・山、祠堂、村・家、祭礼・行事などになっている。ここには、特定の場所について語られるという伝説の特性を利用して、国内のすべての種類の伝説を網羅しようという意図がみえるだけである。つまり Rausmaa 女史分類の「小項目」の役目だけをはたしている。

伝説の比較研究への試みはすでに始まっている。口承文芸の国際会議において比較研究のための伝説分類の大要が論議されたり、伝

説のモチーフ、テーマ、伝播などについての論考(F F C 59・175)もある。また、フィンランドに、日本の腰掛石、鐘が淵、巨人の足跡、長者伝説、夜泣松その他の近似した伝説がみられ、比較研究への興味もつきない。Rausmaa 女史のカタログが有意義であったようだ。フィンランドや世界の研究者にも日本の伝説資料を容易に入手できるようにしてやりたい。伝説の国内的研究と比較研究の両目的に適した分類基準の欲しいところである。

日本では、この点で最も注目すべきは、関敬吾博士の分類案(『日本民俗学大系』ほか)であろう。しかしながら、その後に公刊された伝説集は依然として「名彙」方式の分類を踏襲なし項目の補充に終わっているものが多く、関案が生かされていることが少ない。伝説分類についての論議がなされてよい時期にきているのではないだろうか。

国際的には、比較研究のための国際的分類案やいくつかの国別分類案も提示されており、国内的にも、伝説資料は厖大な量にのぼり、加えて、日本には多くの民族の伝説を原文で理解する人々や国内の伝説に興味を持つ人々にめぐまれている。日本は世界的な視野から伝説の新しい分類案を生むに最も適しているようと思われる。

白田甚五郎先生が十年も前から提唱している口承文芸研究資料センターが陽の目をみる時、伝説はどうに分類されるのであろうか。本学会員の協力を得て科学研究費入手して、新しい分類案作成を本学会の事業として推進することはできないものであろうか。

(たかはし
しづお・國學院大學)

内田 るり子著
日本民俗学で「田植ばやし」といわれるものは大きな研究題目の一つである。これについては文学面、形態面、系統面などの調査研究は從来からあった。それを音楽の面から掘り起こそうとしているところに、この本のユニークさがある。また、韓国と日本との共通点も報告するなど、貴重な民俗学の報告書である。

田植ばやし研究
内田 るり子著
A5判・三八四頁・価八八〇〇円(33円)
町田佳聲/宮尾しげを/三隅治雄
民俗学、芸能史、音楽学的と広汎
な角度から日本全国の民謡を促え
それに正確なビアノ譜や三味線譜
尺八譜を付して集成した全集
第八譜を付して集成した全集

日本民謡全集 全五巻

編集顧問

町田佳聲/宮尾しげを/三隅治雄

B5・各二八〇〇円

第一卷 総論編
民俗学、芸能史、音楽学的と広汎
な角度から日本全国の民謡を促え

第二卷 北海道・東北編
第三卷 近畿・中部編・四国編

第四卷 関東・沖縄編
第五卷 九州・沖縄編

第六卷 近畿・中部・四国編

第七卷 九州・沖縄編

第八卷 近畿・中部・四国編

第九卷 九州・沖縄編

野本寛一著
1500円(200円)

当間一郎著
1500円(200円)

白石昭臣著
1500円(200円)

桜井満著
1800円(200円)

滝沢精一郎著
1000円(200円)

石の民俗

沖縄の祭りと芸能

日本人と祖靈信仰

花の民俗学

日本人のユートピア

カルチャーブックス⑪ 文学と伝説の旅

野本寛一
880円(200円)

雄山閣

東京都千代田区富士見2
振替/東京3-1685